

主 題：栄光の希望を見失わないために
聖書箇所：ローマ人への手紙 8章18節

新約聖書、ローマ人への手紙8章をお開きください。

私たちはキリストとの共同相続人である、つまり、主イエス・キリストが相続されたものを私たち信仰者とともに相続するという事を見て来ました。それは、私たちイエス・キリストを信じる信仰者たちは例外なくすべて神の子どもであり、相続人であると聖書が教えるからです。相続人、私たちはすばらしい永遠の祝福を神から相続しました。そのことについてパウロは私たちに教えてくれるのですが、私たちが受け継いだものは永遠の祝福だけではありません。驚くべきことに、私たちは神ご自身を相続したのです。つまり、万物の創造者である神と親しい者とされたのです。だから、私たちはこうしていつでも神の前に立つことが赦されており、いつでも「お父さん」と呼ぶことが赦されているのです。神が信仰者に与えてくださった永遠の祝福は、私たちが何度学んでも、恐らく、永遠の時間を費やしてもすべてを理解することはできないほど想像を絶するものでしょう。神がくださった祝福のすばらしさを私たちは主から教えられて行くのですが、私たちがいただいたのは祝福だけではないとパウロは言いました。実は、私たちは祝福と同時に、苦難も受け継いだのです。信仰の結果、私たちが受ける苦しみのことです。イエス・キリストを信じるゆえに受ける様々な迫害です。その歴史はこの聖書の中にあふれています。信仰の勇者たちは時代に関係なくその信仰ゆえに迫害を受けました。信仰ゆえに様々な困難を経験しました。

私たちの愛する、また、私たちがサポートするフィリピンのガビノ・ティカ宣教師は41年間に亘ってフィリピンでキリストの福音を宣べ伝え続けて来ました。私も個人的に何十年も彼のことを知っています。また、彼の身に起こった様々なことを聞いていますし、また、そのことを読んでいます。宣教師としてフィリピンの地で働いた41年間の宣教の生活、確かに喜びがありました。同時に、悲しみと苦しみの連続でもありました。1998年に2回目の脳梗塞で植物状態になってしまう、その時までの信仰者としての歩みは大変なものでした。特にその中で、今から十数年前のことですが、ともにフィリピンで伝道して来た同労者の牧師から裏切られます。そして、ベストフレンドと呼んでいたアメリカの牧師たちからも、濡れ衣を着せられて、献金を私的に流用しているということで逮捕され、約1週間弱拘束されました。何も悪いことをしていないのに、神のために忠実に生きているのに、なぜこんなことが起こるのでしょうか？恐らく、ここにいらっしゃる信仰者の皆さんも、どうして？と思うような様々なことを経験して来られたでしょう。喜んで主に従い、主のために献身的に生きていても、生活の中であなたが経験することは様々な苦しみ、悩み、痛みでしょう。でも、そのような経験をして来た、現に、経験しているのはあなただけではないのです。多くの信仰者が経験して来たのです。

しかし、多くの信仰者たち、この聖書に記されている勇者たちも、記されていない勇者たちも、彼らは大変な問題の中にあって、主を見上げ主に対して忠実に歩み続けたのです。パウロはすべての信仰者たちが苦難の中にあって忍耐をもってその苦しみを耐えて、そして、主に対して忠実に歩み続けるようにと読者たちを励まそうとするのです。ローマにいる人々を励まそうとするのです。大変だけれども、辛いけれども、分からないことがいっぱい起こって来るけれど、胃が痛くて眠れなくて、困難な出来事が次から次に訪れるけれど、でも、我々は主を信頼して主に従って行こうと、そのような励ましをパウロが与えるのです。実は、パウロ自身、大変な生活を過ごしていました。そのパウロがあなたは一人ではない、私も同じように闘っているから、ともに主を見上げて主に信頼を置いて従って行こうと言います。彼が与えたこの励ましのメッセージは、時代を超えて、今の私たちにも大きな励ましを与えてくれます。私たちは今日、18節から見て行きますが、ここからパウロが強調しようとするのは、私たちイエス・キリストを信じる信仰者に与えられた希望です。希望について彼は語り続けて行くのです。

イエスを信じる信仰者が持っている希望については、もうすでにパウロは語っています。このローマ人への手紙5章に記されています。「5:1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。:3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。:6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。:7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人がいるいはいるでしょう。:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、

キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。：9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。：10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。：11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」、イエス・キリストを信じる者たちに与えられた希望、そして、その希望は絶対に失望に終わらないということを教えています。

実は、この8：18からパウロは再びこの希望についての教えに戻って行きます。8：18-39節に信仰者が持っている永遠の希望について、すなわち、神の恵みによって一度救われた者は永遠に救われており、その救いを失うことは決してないということを教えるのです。特に、その中でも18-30節で、イエス・キリストを信じる私たちに約束された栄光の希望についてパウロが教えているところを今から見て行きます。希望、それがパウロが読者たちに強調しようとしたことでした。それは信仰者が経験する様々な苦難の中にあっても、忍耐をもってこの栄光の希望のうちを歩み続けて行くようにとパウロが願ったからです。18-25節では、確かに、大変だけれども困難は栄光に入るための必須条件だ、困難を通して私たちは栄光に入って行くのだから、しっかりと忍耐をもって耐えなさいと彼は繰り返して言います。26-30節では、そのような歩みを継続して行くために、神はすばらしい助けを備えてくれていると言って、パウロは三つのことを挙げています。一つは、あなたのうちに内在している聖霊なる神が、あなたのためにとりなしをしてくれるということ、二つ目に、神はすべてのことをあなたの益のためにしてくれるということ、そして、三つ目に、この神はあなたのためですばらしい完全な救いの計画を持っておられるということをお教えるのです。パウロはそのことを伝えることによって、信仰者が希望を失わないように、希望を持ち続け、忍耐をもって主に従い続けるようにとメッセージを与えるのです。そして、このメッセージによって、時代を越えて信仰者は励まされて来たのです。

今日から、私たちは18節から、信仰ゆえの苦しみ、困難の中にあっても希望を失わないその秘訣を学んで行きます。

☆信仰ゆえの苦しみ、困難の中でも希望を失わない秘訣

A. 確信を失わないこと 18節

そのためには確信を失わないことだとパウロは18節で言っています。「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」と。「確信を失ってはいけない」とパウロが言っていると、なぜ分かるのでしょうか？後半に「考えます」という動詞が出て来ます。このことばの文字どおりの意味は「数える」ですが、比喩的には「熱心な研究と論証によって結論に達したこと」を言っているのです。ですから、「熟考する、その上で評価する」となります。パウロはここで「私は考えます」と言いましたが、彼が言いたかったことは「私はこれが間違いないと確信した」ということです。よく考えた上で、考え抜いた上で彼はこの結論に到達したのです。これは間違いないと。ですから、この18節の「私は考えます」とは確信の堅固さを教えているのです。

彼自身は何を確信したのでしょうか？それはこの18節を見て皆さんもうお分かりでしょう。パウロ自身が今現在経験している数多くの困難と、相続が約束された栄光とを天秤にかけると、それらは比較にもならないということです。もちろん、パウロだけではありません。ここに「いろいろの苦しみは」と新改訳聖書は訳していますが、これは苦しみの複数形です。いろいろな苦しみが存在するからです。人によっても違うでしょう。しかし、いろいろな苦しみを経験する中であって、その苦しみと神が約束してくださった祝福とを比較するなら勝負にならないと言うのです。神の祝福がどんなにすばらしいか、そのことが分かるほどに比較することなどできないと、パウロはそのように言うのです。

パウロは「取るに足りないものと私は考えます。」と言っています。これは「価値がない」ということです。苦しみを栄光と比べるならこのような苦しみなど価値がない。なぜなら、神が約束されたものははるかに勝っているからです。私たち信仰者もこのような比較をすることは大切だと思います。いろいろな問題に遭遇した時には問題しか見えなくなって来ます。そうすると、その問題の中で感謝することができなくなります。そして、その問題自体を感謝することなどさらに難しいことです。感謝しなければいけないから一生懸命感謝しようとしても苦しい。でも、パウロはそうしたのです。パウロは問題の中で神に感謝するだけではなく、その問題さえも感謝したのです。それには理由があります。その理由をこれから見て行きます。その前に、パウロは「確信を失わないために」、私たちに二つのことを教えてくれます。

◎確信を失わないために

1. 主の約束を忘れない：「私たちに啓示されようとしている栄光」

一つ目にパウロが言うことは「主の約束を忘れないようにしなさい」ということです。神がどんな約

束を私たち信仰者にくださったのか、その約束を忘れてしまうなら私たちはすぐに希望を失うと言うのです。そのためには私たちに与えられている神の約束をしっかりと覚え続けて行くことです。18節に「将来私たちに啓示されようとしている栄光」と記されています。「啓示」ということばを聞くと、今隠れているものが明らかにされることと、そのように思うのですが、このことばはここではそういう意味では使われていません。「現われる、来る」という意味です。ですから、パウロがここで言いたいことは、将来、確実に起こる祝福の出来事、信仰者であるあなたのところに来るすばらしい祝福の出来事のことです。それはいったい何でしょう？

1) 希望について

ローマ8:23を見てください「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」と書かれています。「待ち望んでいます。」と、希望のことです。何を待ち望んでいるのでしょうか？

a) からだの贖われること

パウロは23節で「私たちのからだの贖われること」と言いました。この罪のからだの贖われること、すなわち、罪のからだの栄光のからだへと変えられることです。パウロはピリピ人への手紙3:21で「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」と書いています。神はご自身の力によって、私たちのこの罪のからだを栄光のからだと同じ姿に変えてくれる、私たちは変えられるのです。この罪のからだから栄光のからだへと変えられるのです。そのことについてはパウロだけではありません。ヨハネもIヨハネ3:2で「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と書いています。「私たちはキリストに似た者となることがわかっています。」と書いています。その次の3:3には次のように書かれています。「キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と、これは希望です。ですから、クリスチャンの希望とは、私たちのこの罪のからだをキリストに似た栄光のからだへと変えられることです。私たちはその日を待っているのです。それがクリスチャンに与えられたすばらしい希望であるとパウロは教えるのです。

b) 神の栄光に与ること

将来に起こるすばらしい祝福の出来事とは何か？私たちがこのように変えられるだけではなく、また同時に、私たちは栄光に与ると言います。これまで見て来ました。コロサイ人への手紙3:4に「私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」とあります。私たちはただ神の栄光を傍観するのではないのです。その中に招き入れられ、その神の栄光に与る者とされるのです。そのような祝福の出来事を私たちは約束されたのです。からだも変えられるし、神の栄光の中に招かれ栄光の神とともに永遠を過ごすのです。それが信仰者に与えられたすばらしい希望です。

2) 確実性について

将来に起こる出来事に関して、もう一つ私たちが覚えておきたいことは、すばらしい希望とともに、その希望の確実性にまでパウロが言及していることです。なぜなら、ただそのように思い込んでいるだけでは虚しいではないですか。「我々はいつか天国に行ける、行けたらいいな」と、聖書はそんなことは言っていません。神の約束は確実に実現するのです。私たちにこのようなすばらしい約束が与えられました。栄光のからだをいただき、神の栄光の中に招かれ、その栄光に与る者となる、これがただの気休めでないこと、これが確実に起こることをパウロは実はこの18節の中でこのことばでもって表わすのです。それは「将来」ということばです。口語訳聖書では「やがて」と訳されています。これは神のご意志によって予定されている、神がそのようなことをすることになっていると、そういう意味を持ったことばです。でも「やがて」ということばを考えると、「間もなく、ほどなく、今に」と辞書は定義しています。どちらかわからないということではなく、パウロが言いたいことは、これは確実に起こること、神がなそうとされていることは必ずそうなるということです。

ですから、パウロはこの18節で、信仰ゆえにいろいろな苦しみを経験している者たちに対して、いいですか、兄弟姉妹たちよ、あなたに約束されたすばらしい永遠の祝福、このすばらしい希望はただの希望で終わらない、確実に実現される、確実にそれが起こると言っているのです。パウロは絶対にこの希望に対して疑いを持っていませんでした。なぜなら、パウロ自身、生きている間にイエス・キリストの再臨に遭遇するという確信を持って生きていたからです。早くイエスにお会いしたいという願いを持って生きていました。そして、私たちもそのような希望を持って生きる者に変えられました。どうですか？皆さん、イエスさまに早くお会いしたいと願いませんか？確かに、この世の中を見ていると、余りにも

多くの悲しみで私たちは「神さま、もう生きているのが辛いです」という思いを持つかもしれません。しかし、パウロが持っていた思いはそうではなかったのです。悲しみや苦しみの連続で少しはそのような思いがあったかもしれませんが、私がイエスに会った時、私が栄光のからだをいただいた時に、私を悩ませてきたこの罪から私は完全に解放される、言い方を変えるなら、信仰を持ってからこれまでずっと、信仰者でありながら主を悲しませて来た私の生活がやっとこれで終わる、主を悲しませることがやっとこれでなくなると、それがパウロの大きな動機だったのです。

そして、それだけではありません。栄光のからだをいただく時に私たちは主にお会いして、主の御顔を拝するのです。美術館に行ったり、映画を見ると、いろいろなイエス・キリスト像が描かれています。しかし、私たちは真にイエス・キリストの御顔を拝することができるのです。私たちは彼とともに永遠を過ごし、彼をほめ称え続けて行くのです。だから、パウロは天を待望していたわけです。そのすばらしさを知っていたパウロは、その時を楽しみにしていました。ピリピ1：23で「私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」と言っています。この地上と天国を比較して、早くキリストのもとに行きたい、そのほうがはるかに勝っていると。パウロはⅡコリント5：8で「私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。」と言っています。その時に私たちは罪を犯すことのない栄光のからだをいただくからです。

確信を失わないために必要なこと、その一つ目は「主の約束をしっかり覚えておきなさい」ということでした。主の約束を忘れてはならないと言うのです。

2. 苦難の目的から目を離さない

二つ目に、パウロが私たちに教えていることは「確信を失わないために私たちは苦難の目的を覚えておかなければいけない、苦難の目的から目を離さないようにしなさい」ということです。何のために苦難があるのか、何のために苦しんでいるのかということです。パウロはそのことを様々なところで教えてくれるのですが、今特に、私たちはⅡコリントをgoいっしょに見たいと思います。そこでパウロは私たちに様々な苦難の目的を明らかにしてくれるからです。

◎苦難の目的

パウロの証 — Ⅱコリントから

(1) 他の苦しみの中にある人を励ますため

Ⅱコリント1：4をごらんください。苦難の目的の一つ目に彼はこう言います。「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」、つまり、私たちが苦しみに会うのは他の苦しみの中にある人を励ますためだと言うのです。彼らのところに行って説教するのではありません。彼らの痛みを自分も経験したから分かるゆえに、その横に行って座ることができるのです。その悲しみを知っているがゆえに、ともに涙することができるのです。神はそのようにして人々の励ましのために、慰めのために、私たちに様々な苦しみをくださるとパウロは言うのです。

(2) 神に信頼を置く者となるため

二つ目は「神に信頼を置く者となるため」です。Ⅱコリント1：9には「ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。」とあります。私たちは神に信頼していると言いながら、本当にぎりぎりのところに来ないと信頼をしない者です。私たちは普段の生活において神以外のものに信頼していませんか？なぜなら、神に頼らなくても生活して行くことができるからです。でも時に神は、私たちをもう神に頼らなければどうにもならないような状況に置かれます。ですから、クリスチャンでなくても、多くの人は病気のときその病気が重いほどに必死になって祈ろうとします。クリスチャンでもそうでしょう。病気のときには祈りが真剣になる、大きな問題を抱えているとその祈りは真剣になります。神はそのような苦しみや問題を通して、あなたに大切なことを教えようとしているのです。それは神に信頼することです。どんなときにも神を信頼して歩むことができるのに、悲しいことに、私たちはその最善の道を選択しようとしません。その結果、私たちはいろいろなことに頭をぶつけるのです。頭をぶつけて私たちは神のところへ帰って行こうとするのです。あのイスラエルの民が歩んだ歩みよりもはるかに悪い者たちがいるのです。今私たちはまさにそのような者です。彼らの生き様を見て「なぜ？」と思っても、彼らのその生き様よりもひどい人間がここにいるわけです。いつまで経っても神に信頼しない、自分の知恵や力でやろうとするのです。神が苦しみに合わせてくださるのは、私たちが神に信頼を置いて生きる者にならなければならないのです。

(3) イエスのいのちが明らかに示されるため

同じⅡコリント4：11に「私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、

イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。」とあります。何のことでしょう？パウロは「イエスのために絶えず死に渡されている」と言っています。つまり、信仰ゆえにいろいろな困難、時には、死を経験するような大変な迫害に遭遇するということです。しかし、そういう中であって、神が私たちを通して働きを為されるということなのです。どのような働きでしょう？それは生きておられる主が私たちのうちに働きを為しておられることを人々に明らかにして行くことです。信仰者は大変な悲しみの中にあっても主の慰めをいただくことができるのです。大変な苦しみの中にあっても主の励ましをいただくことができる、また、現にいただいているのです。ですから、人々は私たちのうちにいらっしゃる主の御力を、私たちを通して見て行くのです。生きておられる神が私たちのうちにいることを私たちを通して人々は見るのです。

(4) キリストの力が覆うため

そして四つ目、この力に関して、皆さんがよくご存じのⅡコリント12:9-10にこのように記されています。「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。:10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」。9節に「キリストの力が私をおおうために、」とあります。この「おおう」ということばは新約聖書の中にはここにしか出て来ないことばです。言い方を変えると「住む、宿る」という意味です。先ほど、私たちは「キリストのいのちが明らかに示される」と見ました。今度は「キリストの力がおおうために」と、パウロは非常に関連したことを話しています。というのは、私たちが日々の生活において、主にすべてを明け渡しながらかんで行くとき、神は私たちを通して、私たちのうちに真の神がいることを明らかにされるのです。いのちの主が私たちのうちにいてくださること、そして、弱さのうちに神がいるということ、神がご自身の方法で人々に明らかにして行かれるのです。先ほども触れたように、喜べない状況で喜ぶことができるのはなぜでしょう？私たちの意志ではないのです。神が喜びをくれるからです。感謝できない状況で感謝できるのです。なぜですか？神が感謝を与えてくれるからです。そのようにして、世の中の人たちには絶対に理解できないことを、神は私たちを通して為してく下さるのです。そして、神がおられること、神の力がいかに私たちの常識を越えているかということ、神は私たちを用いて明らかにしてく下さるのです。このⅡコリントで苦しみには目的があるということについて幾つかのことを見て来ました。もう一人の人物を見ましょう。ペテロです。

ペテロの証 — I ペテロ4:12-16から

I ペテロ4:12-16で彼が何と言っているか見ましょう。「:12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、:13 むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。:14 もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってく下さるからです。:15 あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、悪を行なう者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受けるようなことがあってはなりません。:16 しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、この名のゆえに神をあがめなさい。」。ペテロはここで苦しみの中でも喜べる秘訣を教えています。苦しみには目的があると言います。今から挙げる五つのことを覚えることによって、彼自身がそうであったように、私たちも苦しみの中でも喜ぶことができるというのです。

(1) 苦しみには目的がある 12 a 節

12節の初めを見てください。「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、」とあります。「あなたがたを試みるため」と目的が記されています。「火の試練」が与えられるのはなぜか？苦しみが与えられるのはなぜか？それはあなたがその試練を通して変えられて行くためなのです。あなたがキリストに似た者へと変えられて行くために、別の言い方をすれば、あなたの信仰が成長して行くために神はそのような試練を与えようというのです。

(2) 苦しみは主によって与えられたもの 12 b 節

12節の後半に「何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、」とあります。なぜこんなことが起こったのだろう？と、もしそのように思うなら覚えなさい、神があなたに与えてくれたということをと。神が与えてくれたのなら、そこにはちゃんと神ご自身の完全な目的があるわけです。あなたにそれが必要だからです。そして、もう一つ付け加えるなら、いろいろな苦しみに会うということは、あなたが救われている証拠なのです。前回も見たように、信仰者はみな苦しみに会うのです。神に喜ばれる歩みをしようとすればするほど会うのです。もうそれは定まっていることです。ですから、いろいろな問題に遭遇するというのは、あなたが救われていることの一つの証拠でもあります。

(3) 苦しみは特権である 13 a 節

13 節に「むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。」とあります。「キリストの苦しみにあずかれる」、これは仲間として分かち合うという意味です。パウロが既に教えて来たように、私たちはイエスと一つとされました。イエスを迫害した連中はその迫害を止めることをしません。キリストを見れば常に迫害するのです。あなたのうちにキリストが見られるなら、人々は黙っていません。迫害が起こるのです。ですから、信仰ゆえに経験するいろいろな問題や苦しみは、神からの災いではないのです。神のさばきでもないのです。神からのプレゼントなのです。そのことを知っていた人たちは迫害された時に喜んでいました。イエスの十二人の使徒たちが呼び出されてムチ打たれて、イエスの名によって語ってはならないと言い渡された上で釈放されました。使徒の働き 5 : 40-42 に記されています。「使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言い渡したうえで釈放した。:41 そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。:42 そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。」、使徒たちはイエスのために「はずかしめられるに値する者とされたことを」と、その迫害を喜んでいたのです。キリストのために苦しむことは特権であると彼らはそのように思っていたのです。

◎なぜ、苦しみは特権なのか？

(a) 人のため — 福音宣教により救われる人々が起こされる

なぜ特権なのか？そのことをよく考えてみると、私たちが経験する様々な信仰ゆえの迫害は、実は、それは人のためなのです。あなたが迫害されるのは、あなたが主に忠実に歩んでいるから、キリストのことを証するからです。でも、あなたがそのように主に忠実に歩むから、主のメッセージを語るから、主を知らない人々は福音を聞くわけです。そのようにして私たちのところに福音が届いて来たのです。迫害の中、信仰者はみなイエス・キリストだけが救い主であり、この方だけが希望であるというメッセージを語り続けて行きました。そして、この福音のメッセージを私たちも聞いたのです。ですから、信仰ゆえに経験する様々な迫害は、実は、人々のためなのです。彼らはこのような働きを通して福音を聞くからです。もちろん、それは実際に耳を通して福音を聞くだけでなく、今まで見て来たように、信仰者の生き様を見て、なぜこの人たちは…？と不思議に思うこともあります。そのようなことを経験しませんでしたか？

私が初めて教会に行ったのは、誘われたから以上に、なぜ、この人はみなと違うのか？とその理由を知りたかったからです。ことば以上にその人の生き方が私には不思議でならなかったのです。それが教会に行った理由です。そして、信仰に至ったのです。忠実に歩み続けて行く時にいろいろな迫害があっても、それは人のためであると言います。

(b) 神のため — 神からいただいた務めを神の力でさせていただいている、その喜び

同時に、それは神のためでもあるのです。おかしな言い方かもしれませんが、私たちがそのように忠実に歩んで行く時に、私たちは大きな確信をいただきます。それは私たちが神の力をいただきながら歩んで行く時に、神が私たちを変えてくださり、働きを為してくださる。そのことを通して私たちは神が本当に真実なお方であるという確信を強めて行きます。聖書が語っていることは本当だった、神が言われていることは本当にその通りだという確信を私たちは強めて行きます。みな頭では分かっています。でも、現場で生かせないのは心でどれ程確信しているかです。私たちが主を信頼して主に従って行く時に、神がそのわざを為させてくださる、そのことを見ることによって私たちの確信は増して行きます。当然、私たちの喜びも増して行きます。

(c) 教会のため — パウロの働き、神のわざを見て教会全体が成長する

もう一つ挙げることができます。それは教会のためでもあるということです。というのは、もし教会の中に主に対して忠実に歩む人々がいるなら、間違いなく、その人たちは他の教会員にとって大きな祝福となります。この間も見たように、私たちがそのような信仰者になりたいものです。教会に祝福をもたらすそのような信仰者に。そのためにも私たちは一人ひとりが神に対して忠実に歩んで行くことが必要なのです。

パウロも他の信仰者たちも、今見て来たのはペテロですが、彼らはみな苦しみは神から与えられたすばらしい特権である、神が下さったプレゼントである、そこにはすばらしい計画があり、すばらしい目的があると確信していました。ですから、彼らは苦しみに会ったとき、それを疑って神の前に「神さま、なぜですか？」と言うのではなく、その中にあっても忠実に主を見上げて歩み続けたのです。

(4) 苦しみには報いがある 13 b—14 a 節

13 節の後半に「それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。」とあります。「現われるとき」とは私たちがイエスにお会いするときのことです。しかし、よく気をつけてこのみことばを見ると「現われるときにも」とあります。というのは、そのときも、そのとき以外にも喜ぶのです。

13節の初めに「**キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。**」とありましたが、この「喜んでいなさい」というのは日常の生活においてです。「喜びおどる者となる」というのは「キリストの栄光が現われるとき」、キリストの再臨のときに私たちは大いに喜ぶ者となるということです。今も喜べるし、後はずっと喜ぶと言うのです。なぜなら、忠実に生きた者に対して神のすばらしい報いがあるからです。

私たちが覚えておきたいことは、苦しみにあって喜ぶことができるということです。私たちは苦しみから解放されたら喜ぶことができると思います。この悩みから解放されたら喜ぶことができます。そこが私たちの大きな間違いなのです。本当の喜びは、私たちが欲しいものを手に入れたから得るのではありません。その喜びは長続きしません。一時的です。本当の喜びは神がくれるのです。あなたが神の前に忠実に歩んで行くときに神が下さるのです。それは一時的ではありません。この地上にあって、たとえ問題の中にあっても苦しみの中でも痛みの中にあっても、喜んでいられることができます。なぜなら、あなたが神とともに歩み、神があなたを喜んでおられるからです。喜びは神が与えてくださる祝福です。だからペテロは言うのです。「**キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。**」と。そして、彼らはそのように歩んでいたのです。

ちょうど、イエスがマタイの福音書5章で言われたことをペテロは14節でこのように記しています。「もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。」と。マタイ5：10-12には「**義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。：11 わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。：12 喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいからです。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。**」、イエスはこのように言われました。主のために苦しむのなら喜びなさい、天においてあなたの報いが大きいからと、ちゃんと報いがあると言います。

(5) 苦しみの証の機会である 14b節

14節の後半にそのことが記されています。「なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。」、旧約の時代において、神の栄光が神殿や幕屋を覆ったように、その上にとどまったように、信仰者であるあなたの上にも神はとどまってくくださる、その栄光であなたを覆ってくださるといえることです。出エジプト24：16-17「**主の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。：17 主の栄光は、イスラエル人の目には、山の頂で燃え上がる火のように見えた。**」。ですから、あなたが主に忠実に歩み続けて行くなら、あなたを通してすばらしい証が為されて行くのです。こういうことをペテロもパウロも他の勇者たちも知って、大変な苦しみの中を忠実に歩み続けて行ったのです。

苦難の目的から目を離してはいけません。あなたが今経験しているいろいろな問題には、神の最高のご計画がある、だから、しっかり主を見上げて歩んで行きなさいと。信仰者として大切なことは信仰において妥協しないことです。そのためには今抱えている問題や困難に目を留めてしまっ、大切な主やその約束を忘れてしまうのではだめなのです。却って、主の約束をしっかりと覚えてその約束に立って希望を持って生きて行くことです。

ガビノ先生が大変な問題の中で苦しんでいました。その苦しんでいる父親を見ていた長男のナタニエル—彼は牧師ですが—、父親が逮捕される前に次のように尋ねました。「お父さん、あなたの人生の最高のときを27年間も宣教に費やして来た。宣教ってそんなに価値あるもの？こんなことが起こって、みなが裏切って、大変な苦しみを経験しているのに、主に従い続けるって価値があるの？」と。そのときにガビノ先生が答えたことは「息子よ、主のために為すことは決して無駄ではない。悪を行う人々を見てはいけません。この鉄格子の後ろにいる私を見てはいけません。あなたが見なければいけないのは主であり、そして、キリストを必要としている私たちの人々だ。」でした。そのような状況にあっても文句を言わないで神を称えていました。驚くべきことは、その一週間弱の収容されている間に、その中の一人の黒人の青年がイエス・キリストを信じるのです。そのために私はここに遣わされたと。

信仰者として歩んで行く上において、確かに、私たちには分からないことが山ほどあります。でも、神はちゃんと分かっておられます。そして、私たちを主のために用いようとしておられるのです。妥協してはいけません。主を疑うのではなく、主を信頼して、忠実なしもべとして主に従い続けることです。私たちの神はそれに値するお方です！